

## 韻律論のために

崎村, 弘文  
鹿児島大学教養部助教授

<https://doi.org/10.15017/10440>

---

出版情報 : 文献探究. 19, pp.1-5, 1987-03-31. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :



## 韻 律 論 の た め に

崎 村 弘 文

## 0. はじめに

広義の日本語音韻論を構成する一小部門として韻律論Prosodyなるものを立て、その、研究上の有効性につき検討してみたいと思う。

## 1. 韻律論の研究領域

同領域としては、語句における高低・強弱・音節の長短等の様相=いわゆる付加属性 sound attributes= を取り扱う範囲が考えられる。

従来日本語研究において、それらが相互に関連するものとして論じられることはほとんど無かったようである<sup>1)</sup>が、アクセントを中心とする方言研究の新たな展開とともに、今後次第に必要になって行くものと思われる。

筆者は、この10年足らずの間 琉球諸方言の研究に従い、ほとんど文字に支えられることの無い(或るいは、文字に拘束されずいきいきと流動している)言語の観察を通じて、その必要性を痛感した。

例えば、1) 徳之島北方方言・沖永良部島方言・沖縄本島北方方言等の中には、「へそ」「花」「影」等がそれぞれ [fusuɪ , husuɪ , pusuɪ ] [hanaʰ , fanaɪ , panaɪ ] [kaɲgi , hagiɪ , hagiɪ ] の如く「長い語形」で現われるものが有り<sup>2)</sup>、その現象は、それらの語の<アクセント型>とその変化に関係するものと見られる、という事実。2) また、奄美大島北部中部方言や与論島方言のように、語句中の強めの有無によってその調値に変化を来すものが有る<sup>3)</sup>、という事実。3) さらに、琉球諸方言のほとんどすべてについて、「語句中における単独母音・促音・撥音等の<独立性の乏しい>音素の有無により、条件異調値が生じる」現象が見られる<sup>4)</sup>、という事実。等々、それらは、いずれもここに云う韻律論の見地から総合的に理解されなければならないものであった。

## 2. 韻律論の方法

韻律論は、種々の言語がそれぞれの律Rhythmにしたがって発話されると考えるものであり、その具体的な現われが語句における高低・強弱・音節の長短等の様相であると見るも

(2)

のである。その内容に照らして、従来の音素論Phonology・アクセント研究と関わるところが大きく、方法論的にもそれに負うところが少なくない。

音素についての見方は、プラーグ学派・構造言語学等の成果を取り込んだそれが、日本では既に共通認識となっているものと考えて差し支え無いであろう。生成音韻論的な見方に対する評価は、現在のところ研究者により区々かと思われるが、琉球諸方言の韻律論的研究には大きな力となり得るものと云うことができる。

いわゆる日本語アクセントについての見方には大別二種のものがある、一つは／高／／低／といった＜調素Tone>を立て、いま一つは語句に＜封筒のようにかぶさる＞＜アクセント素Prosodeme>を立てる。しかし、いずれも、＜下がりめの有無＞＜低起か高起か＞といった弁別の特徴を云々するのみで、語句全体がどのようなまとまり方＝調値＝を示すかといった統語的特徴について重視しない点では、同様である。

琉球諸方言の＜アクセント＞は、「語句の音節数に関わりなくn種の調類＝音韻論的アクセント型＝が認められる」n型体系を持つもの<sup>5)</sup>であり、研究者によってはこれを＜語声調＞とも呼ぶ<sup>6)</sup>性格のものである。この場合、上記のような見方によっていたのでは、どうもその性格を的確に把握することはできそうにない。

例えば、奄美大島中部方言はいわゆる1型アクセントの方言であり、その＜アクセント型＞は全く語句の弁別に関係しないが、まとまりを示すには十分に役立っている。そして、さらに云えば、それは、本来まとまりを示すために存在するものではなく、同方言の持つ自然の律Rhythmにしたがって発話された結果現われたと見るのが適当なものである<sup>7)</sup>。とすれば、その性格を的確に示すのに、下がりめ云々を以ってするよりも長短の語句に亘る＜アクセント型＞（ないし律）の様相を以ってするのが妥当なことは、おのずから明らかである。また、それによって、同方言がやはりn型体系を持つものであると明白に示されれば、琉球諸方言の研究にとってより有意義でもある。

つまるところ、従来の音素論・超分節音素論の枠組みでは把握しきれない部分が有るので、生成音韻論的な考え方を取り入れて新たに有効な理解を図ろうとするわけである。琉球諸方言にこの考え方を適用した具体的成果は、稿末に示す通りである。そこでは、イ) 琉球諸方言の語句を構成する韻律単位＝音節＝は、シラビームからモーラへと変化しつつあるのではないか、ロ) 喜界島方言のように、＜アクセント＞の体系性を重視する観点からはいまだ音韻としての促音を持つに至っていないと考えられるものも有る、といったようなことが明らかになりつつある。本土諸方言についても、これを適用することで、例えば、広島・東京両方言の起伏式同一アクセント型の語に認められる微妙な違いを「前者の場合下がりめにかなりの強めが伴ない、後者の場合それが無い」といったかたちで表現する、等のことが可能となるであろう。

### 3. 補足ならびに関連する問題

3-1 なお、韻律論Prosodyと似て非なる研究の在り方としてプロソディー分析Prosodic Analysisなるものがある。それにつき一言しておきたい。

該分析は、ロンドン学派の創始者Firthの提唱したものであり、諸言語の音韻体系の有効な理解を目指す研究方法の一つとして知られている。

かなり難解で特殊なものとされるが、中国語音韻学等の知識を援用して見てみると、それは、中国人がはるか昔から行なって来た音韻分析の方法——声母・介母・韻母といった<系列>に音韻を分類し、声母の有声無声(清濁)・有気無気や韻尾の様相・声調等を問題とする——にきわめて近いものであり、弟子のHendersonが行なったタイ語の分析例などはまさにそのものと云っても良いほどのものである。

音素論的分析方法とは異なる点が多く、ここに云う韻律論に取り入れるべき点もあまり多いようには思われないが、ただ声調について注目するところが有るのは多とすべきであろう。将来その分野での研究が進めば、或るいは、韻律論と関わりどころが有るかもしれない。

3-2 また、プロソディーと云えば、ただちに詩のそれが思い浮かぶ。それについても一言しておきたい。

ヨーロッパ流の詩学では、プロソディー即ち<韻文律>について次のような考え方が見られる<sup>8)</sup>。

韻文律は母音の1)長短, 2)強弱, 3)音節(syllable)の数のいずれかを規準として声音系列を分割するところに成立する。ギリシャ・ラテンの古典語は1)により、ゲルマン語系(英語・ドイツ語)は2)により、ロマンス語系(イタリア語・フランス語)は3)による。

これに続いて、<日本語の詩の場合も3)によると考えられる>と参考文献に有るが、確かに、歴史時代以降の書かれたものについては、ほぼそのように見てきしつかえないであろう。しかし、それより前の時代のもの或るいは書きとめられることの少ないものについては如何であろうか?

『万葉集』の古歌中にいわゆる音数律に合わぬ句を含む歌が有るのは周知の事実であるし、奄美・沖縄の民謡の中にも8・8・8・6等の音数律に合わぬ部分を持つものがしばしば目に付く。また、印刷刊行までされるものであっても、例えば、いわゆる歌謡曲等は同様の部分を長母音で埋めるといった手法を取っており、それはそれで問題となるところである。現在のところ、そうしたことに関する詳しい論著が無いのは、実に残念である。

また、上記1) 2) 3)を通じての<韻文律>の論も、有れば甚だ有益であろう。後考を俟つ。

(4)

#### 4. まとめ

ここに云う韻律論の考え方は、琉球諸方言<アクセント>の研究を進める上で必要なものであり、本土諸方言の研究にも少なからぬ実りをもたらすものと思われる。

なお、これに類する考え方は既に服部四郎氏らによって示されているが、筆者は、それにいくぶんかの蛇足?を加えさせて頂いて、あらたな研究の展開を期待したく思った次第である。

#### 【 注 】

1 わずかに、下記の金田一氏・服部氏等の論文を挙げ得るのみ。

2 拙稿1981・1982・1983a・1984・1985b・1987a参照。

3 拙稿1985d・1986b参照。

4 拙稿1981~1987a参照。

5 <N型体系>とも。下記の上野善道氏論文参照。

6 例えば、早田輝洋氏等。ただし、正確には、中国語等のそれと区別して、「複音節語声調」とでも呼ぶのが適当であろう。

7 詳しくは、拙稿1985d参照。

8 下記の『美学辞典』増補版371頁以下参照。

#### 【参考文献】

##### 1. 著書

王力, 1958初刊, 漢語詩律論

竹内敏雄(編), 1974, 美学辞典 増補版

K.L.Pike, 1946, Tone Languages

原口庄輔, 1977, 日本語の音調パターン——オートセグメンタルセオリーの研究

松浪有・池上嘉彦・今井邦彦(編), 1983, 大修館英語学辞典

##### 2. 論文

上野善道, 1984, N型アクセントの一般特性について, 『現代方言学の課題』2所収。

金田一春彦, 1980, 平声軽の点について, 『国語学』41

1985, 高さのアクセントはアクセントにあらず, 『言語研究』48

崎村弘文, 1981, 徳之島の方言(1)——伊仙町目手久方言の実態——, 『鹿児島大学文科報告』17

1982, 徳之島の方言(2)——天城町松原方言の実態——, 『鹿児島大学文科報告』18

- 1983 a, 徳之島の方言(3) ——徳之島町亀徳方言の実態——, 「鹿児島大学文科報告」19
- 1983 b, 琉球先島方言のアクセント体系・再考, 「鹿児島大学南方海域研究センター紀要」4の1
- 1984, 沖縄今帰仁方言のアクセント体系, 「文献探究」14
- 1985 a, ゴンザのアクセント・私考, 「文献探究」15
- 1985 b, 今帰仁方言のアクセント体系・追考, 「沖縄文化研究」11
- 1985 c, 喜界島方言のアクセント, 「鹿児島大学文科報告」21
- 1985 d, 奄美大島中部方言のアクセント体系・再考, 「鹿児島大学南方海域研究センター紀要」6の1
- 1986 a, ゴンザのアクセント・私考 続, 「文献探究」17
- 1986 b, 与論島方言のアクセント体系, 「鹿児島大学文科報告」22
- 1987 a, 沖永良部島方言のアクセント体系, 「鹿児島大学南方海域研究センター紀要」7の1
- 服部四郎, 1973, アクセント素とは何か?そしてその弁別的特徴とは?——日本語の“高さアクセント”は単語アクセントの一種であって, “調素”の単なる連続にあらず——, 「言語の科学」4
- 早田輝洋, 1977, 生成アクセント論, 「岩波講座日本語」5所収

40ページより続く

私方にお泊りなさんせ、近頃造作をしよりまして、随分奇麗にして居ります(もふ追付七つでござりましよふ小倉送行がなさんしたら五つ過二成よりましよふどふぞ私方に御留りなさんせ近比造作を仕よりまして随分奇麗に致しております)

或は、旅の「禅僧」が旅の事情を尋ねられて、ハイ、拙僧は毛澤山武蔵寺幸好開禪師の會下に居りました、ちとした色事で暫く出國致しよります(ハイ拙僧ハ毛澤山武蔵寺臭穴和尚の會下におりましたかちとした色事の訳で暫く出國致しよります)

しかも、「——よる」を用いている人物は、「伊勢道中不案内記」においては、全て筑前出身の者ばかりである(「禅僧」が筑前の出身である事は、「愚津郎兵衛」が「禅僧」の国元を尋ねる所で判明する。又、「黒崎」については言を要しまい)。

つまり、「伊勢道中不案内記」作者は、「——よる」を佐賀方言の話し手に使わせる事が出来なかつたので、「——おる」だけを使わせたといいのではなく、両者を選択したうえで、佐賀方言の話し手には「——おる」を使わせ、筑前の方言の話し手には「——よる」を使わせたといい事になるのではなからうか。そして、「伊勢道中不案内記」に反映する佐賀方言が佐賀市近郊の方言であるとするならば、現在の佐賀方言における、東部の相違(つまり、東部では「ヨル」・「トル」、西部では「オル」・「トル」の対立)は、必ずしも幕末期にまで遡る事は出来ず、かつては佐賀東部においても「オル」と「トル」の対立によつて「動作進行態」と「状態継続態」が行われていたのではなかつたのであろうか。そして、「オル」・「トル」の対立から「ヨル」・「トル」の対立への変化には、筑前(例えば、福岡市とか久留米市)の影響があつたと考える事が出来る様に思われるのであるがどうか(尚、参考迄に付け加えておくと、案間坊暮成の作品においても「オル」・「トル」の対立である)。

九州大学大学院博士課程